

「さて、行くとしますか」

僕はいつものように、カブに火を入れてゆっくりと走りだす。
いつもと違うのはただ一つ、目的地が最初から決まっている事。
珍しく姉貴に今日来てと連絡が来たから向かっている。
向かう先は、姉貴が社長している会社。

「今回の出社は何日ぶりだろ…？」

前回は行ったのが、今年の入社式だけ？
もう、ゴールデンウィークも終わったから、一ヶ月以上行ってないのか…？
そんなことを考えながら少し走ると見えてきた。

「相変わらず大きいビルだなあ…」

本社ビルの横にある地下へのスロープを下って行き、
駐車場に併設されている実質僕専用のバイク駐輪場へ。
カブを止め、ヘルメットを片手にエレベーター前へ

「どこ行けばいいんだっけ、受付に顔出せば良いのか…？」

ぼーっと、エレベーターを待っていたら後ろから話しかけられた。

「セナ姉、待っていたよ」
「お、咲夢か。久しぶりじゃないか…早速けど何で僕は呼ばれたんだい？」
「ああ、そのことなら上で戀姉が待ってるからそっちで話そう」
「了解した。じゃあ上に向かおうか、エレベーターも来たことだし」

エレベーターに咲夢も乗ったのを確認しつつ目的の階層のボタンを押す。

「咲夢、いつも通り社長室で良いのかい？」
「いや、役員会議室で待っててって言ってたよ」
「了解、ふむ…クビでも宣告されるのかな？」
「違うと思うよ。何で呼んだのか、戀姉に聞かなきゃ分からないけど」

咲夢と一緒に役員会議室の中で待っていると姉貴がやってきた。
いつも通りダルそうな顔つきしてるし、

「やっほーセナ、久しぶり」
「姉貴、久しぶり、僕は何故呼ばれたのかな？」
「んー、部下を持ってみる気あるー？」

姉貴が僕に決定事項を伝えることはあるけど、頼みごとをしてもらうことは滅多に無い。
何か裏がありそうだな…。

「…部下？ 本当にどうしたんだ姉貴」
「いやさー、人事があちこちに突っ込んでみては問題起こす子が二人いてねー」

「冷たい話だけどクビにすればいいんじゃないか…？」
「クビにできたら苦労しないんだよねー。セナ、滅多にテレビ見ないでしょ…？」
「基本的にキャンプ場で寝起きしてるから。見ても燃料代わりに買った新聞とかかな」

確かに情報の入手手段は新聞か、咲夢からの定期的な生存確認含めた連絡だけ

「新聞見てたりするならわかるでしょ…？　うちが現役アイドル預かってるの」
「あー、なんか見た気がする。まだ預かってたの…？」
「セナ姉、流石に世間に疎すぎでしょ…」
「今年の入社式でうちに就職したんだー」
「はっ!?入社式行ったけど居なかったじゃん」

入社式、役員席から新入社員みてたけど、居なかったはず。
いや、あの日アイドルユニットが演目として踊ってたな…。

「演目でアイドルユニット踊ってたでしょ、あの二人セナ姉の部下になるから」
「咲夢、マジで言ってる？…何を教えればいいの？」

現役のトップアイドルの二人を預かる。
僕の生活がキャンプ場からキャンプ場っていう形で放浪してるの知ってるのに、僕に預けるの…？

「何でも良いよー。キャンプとかでもいいし」
「キャンプでもいいんだ…移動手段は？」
「一応、二人共普通二輪もってるみたいだからバイクかなー？」

問題を起こす子二人を抱えてキャンプ、そして、バイクが移動手段か…。
うち系列のケーブルテレビの暇なクルー使えば安全性上がるし、話題にもなる。
教育としてじゃなくて現役アイドルのキャンプ生活とすればスポンサーとかも取れそうだし。

「咲夢、うちの番組枠どっか空いてないか確認しておいて」
「配信することによってクルーによるアイドルの安全性を確保する気…？」
「ついでに話題確保かな。後ろからテレビクルーが追いかけてインカムの内容とか、キャンプの内容放送するってどうよ」
「いいと思う、デメリットとしてはケーブルとはいえ、一般人であるセナ姉が常時映ることかな…？」
「その点も大丈夫じゃない？昔みたいうちの芸能事務所に登録して活動すれば」
「姉貴、今の僕は単なる一般人だよ。あの時で活動は辞めたんだから」
「えっ？セナ姉って芸能人だったの…？」
「咲夢には言ってなかったっけ、僕は中学の時は芸能人だったんだよ。今はもう辞めたけどね」

活動再始動って名目でも、はいそうですかっていうわけに行かないでしょ、相変わらず姉貴がアホだ。

「戀姉…流石に雑過ぎ、まあそろそろ二人共来るよ」
「えっ、今日から…？」

部下持つ話した直後に呼んでるってことは…
これやっぱり決定事項だったのか…。

ノックの音が4回会議室に響いた。

「入って」

咲夢が入室許可をだした。さて、どんな子だろうか…。

「しっつれーしまーす」

「失礼します」

リクルートスーツに身を包んだ二人が入ってきた。

「こちら依藤戀（えとう れん）社長とセナ専務。二人共、挨拶して」

咲夢が僕達の紹介してくれた。

僕達を見て二人は驚いてるみたい。

誰もが知ってる企業の社長と専務にしては僕らは想像より若すぎるよな。

「始めまして Leaf Cherry Blossoms の葉月莉桜（はづき りお）と」

「同じく L C B の桜井紅葉（さくらい くれは）です」

葉月さんと桜井さん。お互いの苗字にお互いの名前が入ってる。珍しいユニットだ。

「やーやー、依藤戀だよー！ 気軽に戀ちゃんとも読んでくれたまえ」

「姉貴…。まあ良いか、後々後悔するのは姉貴だし。僕は依藤セナ、このダルそうな顔してる奴の妹だよ。一応、今日から君たちの上司になるらしい、気軽にセナさんとも呼んでくれ、よろしく」

僕の部下になるっていう話、聞いてなかったのか混乱してるみたいだ。
姉貴、突発的に決めたな…？

「姉貴、この話二人に周知事項として知らせてあるんだよね？」

部下になる話が二人に伝わってないっていう可能性が出てきたから、念の為、あり得ないと思うけど、姉貴に確認を取る。

「咲夢一、どうだっけ？」

「それ、私に聞きます？ 戀姉が上司にだけ伝えといて、当日驚かせようって言ってたよ」

「あ、ごめんね。二人共座っていいよ。咲夢、お茶でも淹れてあげて。んでさ、姉貴よ何故、伝えなかった」

「えへっ…二人共ごめんね」

そんな謝り方があるかって思うけど、
その前に確認したいこと幾つか聞かないとね。

「姉貴、いつから始めるの、そもそも、二人共スーツだよ？」

「その点は私から、うちの各方面で全面バックアップで動けば夕方までには準備出来そうだけど、明日出発で良いかな。流石に、呼び出して、ハイ出発っていうのは流石に酷すぎると思うし」

それもそうだと思う、何乗るのか知らないけど、今日の僕、カブで来てるし、キャンプグッズ何も積んでないし、R25 そろそろ整備したいんだよね。

「そういえば、使うバイクどうするの？僕は自分の使うけど、R25は整備するから、カブしかないよ？」

「マジかー、ならこっちでもカブを用意しようか現役アイドルと新人アイドルが三人でツーリングする絵って面白いと思うんだよね」

「あの、番組にするんですよね…？ それならルール決めてやりませんか？ SNSとかでいいね獲得数×十円とかでその日の観光費がもらえる…みたいな？」

葉月さんが面白そうなことを提案してくれた。

僕は至って平気だけど、若い子たちには難しいんじゃないかな？

「葉月さん、それって食費とか移動費はどうするのか？」
「それは番組予算でいいんじゃないでしょうか？　あくまでも決めるのは道の駅とかでソフトクリーム食べたりする観光費なので」

「サイコロキャラメルの箱投げて行き先を決める、サイコロの旅でもいいんじゃないか？」
「僕的には、サイコロの旅は過酷だし、目的地を決めて、期限を決めて走ったりする方が近くない？」
「セナ姉とLCBの二人、片方ずつで何処から何処まで72時間でたどり着けるかとかの方がいいじゃない？」

「大前提として過酷だねえ」

一番まともなのが葉月さんの案かなあ
さて、そうすると何処のソーシャルがいいかな…。

「そういえばさ、桜井さんはどうしたらいいと思う？」
「わ、私は咲夢先輩の案がいいと思います」

— 2時間何処から何処まで辿り着けるか —

咲夢の案の元ネタは銀座から札幌だけ？
葉月さんのネタも公共交通機関を駆使して現在地から行ける場所が1〜6に振ってあって、一度サイコロを振ったら目的地に着かないと次に進めないんだだけ。

「姉貴、最初キャンプでいいって言ってたのに、ツーリングになっちゃうよ？」
「あー、なんでもいいからねー！」
「一応咲夢の案と葉月さんの案、どっちで企画通るか会議通してみて。会議通す時誰発案かは秘密にしといてね。トップアイドルユニットの顔色伺おうとしてくる奴は要らないから。で、葉月さん達のこれからの仕事は？」

コミュニケーションは大事だよ。無理やりはクズのやることだけど

「いやー、今日からセナの部下だから何してもいいよー。咲夢、いつもどーりに処理しといて」

「戀姉…了解。給料はちゃんと払うからね、安心してね二人共」
「ありがとうございます。紅葉、良かったね」

さて、これからどうしようか、そして、何故、こんな礼儀正しい二人が問題児扱いなのか、確認しないと。

「葉月さん、桜井さん。これから何か予定あるかな？ なければちょっと僕と食事に付き合っただけ欲しいのだけれど、大丈夫かな？」
「私は大丈夫ですー」
「わ、私も、大丈夫ですっ」

良かった。さて、リクルートスーツとはいえ、まともにスーツ姿の二人はいいとして僕の格好は、革ジャンにジーパンだからなあ。二人に任せるか。

「二人共、何処に行きたいところある？」
「私はスイーツバイキング！」
「わ、私も」
「りょーかい、じゃあ、あそこのホテルバイキングでいいかな。スイーツ系も揃ってるはずだし…姉貴、頼んだ」
「はいよ夢何時ものところ、3枚でいいよね」
「了解しましたセナ姉はそのまま向かってください、二人は私が直接お送りします」
「んじゃ、後はよろしく。二人共後でね。じゃーね、姉貴、咲夢」

そんなこんなで部下を持ち、更に芸能活動復帰する事になってしまったわけだが、僕を知ってる人間は居るのだろうか…？
いざ復活しました。だけど、大ブーイングの嵐だったら嫌だねえ…今を生きる人気アイドルユニットL C Bの腰巾着みたいに見られてしまうじゃないか。
あの後、何時も三人で行くホテルバイキングで二人をおもてなしして、僕の事を二人に教えたなら、紅葉ちゃんは気づいてたみたい。僕はいわゆる売れなかったアイドルに属する。僕なんか知ってる人居るんだなってちょっと珍しかったし、嬉しかった。

そろそろ企画も始動するよーって知らせを受けて、何時ものように燃料にする前の新聞広げたら、目を疑った。『何があった？セナ現役復帰！』なんて見出しがあるし、記事の内容に目を通すと姉貴が記者会見開いてるっぽい。何してくれてるんですかね。姉貴は…。

今日はクルーと一緒にL C Bの二人がココに来る予定になってる。いつ来るのかは知らないけど。
目的地はとりあえず二人がカブになれるのを目標にしたいから、近場をS N Sで募集しようかな。

一時間ぐらいココで時間つぶしながら募集したら数票位集まるでしょ。そんなことを考えてたらカブの独特な音が聞こえてきた。乗って来たんだあの二人。これならもう少し遠くてもいいかな？

「おはよう二人共、カブには慣れたかい？」

「めちゃくちゃ楽ですね、カブって」

「単純なおじいちゃんバイクだと思ってました。ビジネスバイクの異名を持つだけありますね。どんな条件下でも乗れそうです」